



国指定天然記念物「幸神社のシダレアカシデ」

東京都日の出町の幸神社参道近くに、昭和 17 年に国指定天然記念物になった「シダレアカシデ」がある。幹周約 1.7 m、樹高約 5 m、シダレ状の直径約 5 m で、樹齢は通説によると 700 年以上といわれ、シダレ状に四方に枝を垂れる姿は、腕を伏せたようにとても優雅な形をしている。アカシデ（ソロノキ）の変種で、幹と枝がらせん状によじれて垂れるという大変珍しい（日本に 1 本しかない）形をしている。

（東京都支部）

画像提供：日の出町教育委員会



【春】



【夏】



【冬】

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、日本社会全体で明るい将来像を構築しようとする機運が確実に広がってきたと実感しながら、新たな希望を胸に輝かしい新春をお迎えになられたことと思います。

今年こそは、造園建設業を取りまく経営環境が大きく改善し、持続的な発展を見通すことができる年になることを期待したいと思います。一年前に、国政において新たな政権が誕生。「アベノミクス」が打出され、財政出動による当初予算・補正予算を通じた公共事業費の拡大、公共工事設計労務費単価の引上げ、ダンピング対策の強化、社会保険等未加入対策の本

格化、現場労働者の賃金水準の確保等々矢継ぎ早の対策が具体性をもって始動しました。いずれも、当協会として重点的に要望・提言活動等で取組んできた事項に他なりません。

つい二年前まで、将来の発展への制約条件面ばかりが強調され、ともすれば豊かな国民生活の実現に必要不可欠である良好な社会資本の整備・維持管理への取組みが軽視されがちで、私

たちの業界も過酷な競争環境下に置かれていました。日造協の組織、会員企業を挙げてその改善に向けた活動を展開しつつも、厳しい現状を打破することのできないもどかしさを覚えていたことを思い返すに、不可思議ささえ感じる、いきなりの変化が起こりました。

また、東日本大震災復興事業の加速化、強くしなやかな国民生活を図るための「国土強靱化基本法」の制定による防災・減災対策の実施、2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けた準備の本格化、オリンピックや富士山の世界文化遺産登録等を受けた「おもてなし」の環境整備への取組み等々、私どもが「造園力」を発揮することが期待できる機会が急速に拡大してきました。

このような状況の変化を着実に受け止め、造園建設業の活動領域の拡大と働く人がやりがいを感じ、誇りを持てる明るい未来の魅力ある環境づくりに、この一年、皆様とともに日造協活動に取り組んでいきたいと考えています。本年も皆様のご指導、ご協力、ご支援を宜しくお願い申し上げます。

年頭に当たって

明るい未来を育むために

一般社団法人日本造園建設業協会

会長 藤巻 司郎



謹賀新年

造園のデザイン、設計技術、表現手法の向上を図るため、(一社)日本造園建設業協会主催、(一社)ランドスケープコンサルタンツ協会・全国高等学校造園教育研究協議会共催、文部科学省・国土交通省・全国農業高等学校長協会・(公社)日本造園学会・NHKの後援で実施している「全国造園デザインコンクール」は昭和49年に創設し、第40回と記念すべき年を迎えました。そこで、「日造協ニュース」新年号では、近年コンクールで受賞された方々に参加いただき、『造園の夢を描く』をテーマに新春座談会を開催し、コンクールに参加した時の思い出や現在にどうつながっているか、さらに、後輩への助言、造園界への期待など、新年にふさわしいフレッシュなお話をいただきました。

コンクールは格好の学びの機会
入江氏



入江 今日座談会の司会を仰せつかりました東京農業大学の入江です。不慣れ

なこともあります。少しでも多くの方のお役に立つ座談会にしたいと思っています。

新春座談会『造園の夢を描く』と題し、近年の造園デザインコンクール入賞者の方々から、夢のあるお話を伺おうというものです。まず、コンクールに参加するきっかけや参加する前と後で変わったことなど高校時代(「過去」)を振り返ってのお話をいただき、その後、いま関心を持っていることやお仕事、学んでいることなどの様子(「現在」)、そして、後輩へのアドバイスやご自身の将来展望、造園業や社会に期待することなど(「未来」)について、順にお聞きしたいと思います。

“造園の世界”へのきっかけは全国造園デザインコンクール

入江 私は、コンクールは自分を成長させる絶好の機会だと思っており、研究室の学生に、コンクールへの参加をちょうど勧めているところです。さて、皆さんがコンクールに参加したきっかけは何だったのでしょうか。また、現在、造園に関わる場所で皆さん活躍されています

が、それは造園を好きになったからだと思います。コンクールの思い出なども含めて、鈴木さんからお願いします。
鈴木 滋賀県立八日市南高等学校で講師をしております鈴木と申します。
コンクールに参加したきっかけは、高校で専攻班を選ぶ際に、緑地デザインを

「全国造園デザインコンクール」40回記念 新春座談会『造園の

座談会出席者

- (司会) 入江 彰昭氏 東京農業大学短期大学部 環境緑地学科准教授
朝日 純代さん 東京農業大学短期大学部 (長野県須坂園芸高等学校出身)
雁瀬 貴次さん 西武造園株式会社 (滋賀県立八日市南高等学校出身)
鈴木多偉樹さん 滋賀県立八日市南高等学校講師 (滋賀県立八日市南高等学校出身)
鈴木 幸 さん 株式会社第一緑地 (長野県須坂園芸高等学校出身)
野口 恵理さん 千葉大学園芸学部3年 (長野県須坂園芸高等学校出身)

オブザーバー：全国高等学校造園教育研究協議会 理事長 大室 徳治氏
(一社)日本造園建設業協会：会長 藤巻 司郎
常任顧問 高梨 雅明
総務委員会広報活動部会長 鈴木誠司

希望したからで、この専攻班が課題として、コンクールに応募していました。
造園に興味がなかった訳ではありませんが、野球部を引退するまでは、野球に夢中でした。部活の引退後、先生から、いろいろ声を掛けて貰うようになり、造園の話や参考になる場所に連れて行ってもらったりしました。
座談会の資料にあるコンクール入賞時の自分の図面を改めて見ると恥ずかしくなりますが、この図面を描く前と後では、造園への関心度が変わったというか、こ

地域になくてもならない学校へ
鈴木さん



んな木があったのか、こんな庭だったんだとか、登下校の道も違って見えました。
それと図面をつくりあげた時の達成感は大変だっただけに強く残っています。
入江 コンクールやコンペは、経験や知識、アイデアをどれだけ持っているかどうか、作品の良否に直結してきます。
制作に当り、既存の知識を整理することも必要ですし、新たに学ばなければならぬことも出てきます。そして、それが自分の身に付いていく格好の勉強の機会となり、そうした経験から、登下校の景色も違って見えるのだらうと思います。
鈴木 私は長野県の(株)第一緑地で施工に携わって3年になりますが、もともと造園志望ではありませんでした。
私が卒業した長野県須坂園芸高等学校は、園芸科と食品科学科、農業経済科、造園科があり、入学当初は食品に進もうと思っていました。
それが、造園になったのは、今日座談会に参加している同級生の野口さんが、「一緒に絵をかかない？」と誘ったからです。コンクールがきっかけで、造園の道に入りました。



平成20年度 第35回 入選 鈴木多偉樹 滋賀県立八日市南高等学校 (高校生の部・住宅庭園部門)

支部長

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 沖縄県 | 鹿児島県 | 宮崎県 | 大分県 | 熊本県 | 長崎県 | 佐賀県 | 福岡県 | 愛媛県 | 高知県 | 香川県 | 徳島県 | 山口県 | 島根県 | 鳥取県 | 広島県 | 岡山県 | 和歌山県 | 奈良県 | 兵庫県 | 大阪府 | 京都府 | 滋賀県 | 三重県 | 愛知県 | 静岡県 | 岐阜県 | 石川県 | 富山県 | 新潟県 | 長野県 | 山梨県 | 神奈川県 | 東京都 | 千葉県 | 埼玉県 | 群馬県 | 茨城県 | 福島県 | 山形県 | 秋田県 | 宮城県 | 岩手県 | 青森県 | 北海道 | | | |
| 森根 | 井上 | 徳地 | 川津 | 木上 | 田上 | 久保 | 執行 | 成瀬 | 植田 | 古家 | 関家 | 多々良 | 持田 | 田中 | 正本 | 小林 | 井内 | 中島 | 中西 | 坂上 | 小林 | 高木 | 宇坪 | 儀賀 | 大島 | 内山 | 小栗 | 北郷 | 久郷 | 磯部 | 山崎 | 齊藤 | 山田 | 田丸 | 鈴木 | 渡邊 | 山田 | 川上 | 櫻井 | 渡部 | 加藤 | 星 | 米内 | 山内 | 嘉屋 | 森根 | 木上 |
| 清昭 | 恒治 | 信一 | 正潔 | 豪裕 | 和男 | 英利 | 要三 | 誠司 | 敏弘 | 正義 | 正健 | 多々良 | 正樹 | 静雄 | 和義 | 祥之 | 信明 | 正典 | 淳一 | 啓造 | 嘉七 | 晴芳 | 勝郎 | 内山 | 小栗 | 北郷 | 久郷 | 磯部 | 山崎 | 齊藤 | 山田 | 田丸 | 鈴木 | 渡邊 | 山田 | 川上 | 櫻井 | 渡部 | 加藤 | 星 | 米内 | 山内 | 嘉屋 | 森根 | 木上 | | |

近年のコンクール入賞者が語る

夢を描く』

コンクールには1年から3年まで3回参加しました。改めて図面をみると1年目は深い考えもなく取り組み、2年目の住宅庭園に取り組んだ際に、母がやっていることなどを見ていたからか、キッチンガーデンを取り入れたり、自分の考えも入れられるようになったと思います。そして、卒業後は、すごい図面を描く

社長がいて、もっと勉強させてもらえたらと、入社させていただきました。雁瀬 私は野球がやりたくて高校を選びました（笑）。造園を意識したのは野球部を引退してからで、コンクールは、泊まり込みでの合宿で、寝ずに描き続けていた記憶があります。

進路は先生にこういう学校があるよと紹介をいただき、京都造形芸術大学に進学し、現在の西武造園㈱に入社しまだ1年目です。1カ月前に現場での研修が始まったばかりです。

大学時代は、与えられた調査や設計に取り組み、設計図面を仕上げていく過程が楽しかったです。そうしたことも踏まえて、私もコンクールがきっかけで、造園の世界に入った一人です。

入江 コンクールやコンペは、生みの苦しみもありますが、楽しさが勝りますね。

雁瀬 …生みの苦しみの方が多いです（笑）。大学の卒業制作は大変でした。

入江 私は学生の時にコンペに参加し、

コンクールも現場から考えると面白い 雁瀬さん



平成 21 年度 第 36 回 入選 鈴木 幸 長野県須坂園芸高等学校（高校生の部・住宅庭園部門）

日本の美、日本の庭を守りたい 鈴木さん



実際、コンクールに取り組むと、1カ月の間、朝から晩まで図面づくりでした。いま振り返ると、強い意志や目標があった訳ではなく、何となく始めたことでしたが、出来上がった時の「やった！」という気持ちが、今につながっています。

それ以前は、植物に触れることもなく、母が鉢植えやプランターで何かしていても、「楽しいのかなあ」と思う程度でした。しかし、コンクールの後は、普段道を歩いている、「この木いいなっ」とか、「家にあったらいいなっ」などと思うようになりました。



平成 20 年度 第 35 回 入選 雁瀬貴次 滋賀県立八日市南高等学校（高校生の部・街区公園部門）

総支部長
監事

北海道 東北 関東 中部 近畿 中国 四国

鬼頭 正本 坂上 大島 磯部 加勢 渡部 廣澤 矢野 安田 北田 渡部 涌井 森根 蓑茂 正本 星 廣澤 西岸 田丸 田澤 須磨 執行 坂上 酒井 小林 久保 木上 鬼頭 加勢 奥本 小川 大八 大島 枝吉 宇坪 磯部 有路 阿部 望月 梅川 卯之 和田 林 佐々 藤巻 一般社団法人日本造園建設業協会
一 信 嘉 久 充 佐 清 幸 茂 功 佐 史 清 大 三 清 芳 敬 重 英 信 一 正 和 正 慎 充 寛 陽 勝 嘉 茂 啓 久 宗 勝 真 澄 新 輝 幸 和 司 郎
慎 一 大 明 七 人 晴 界 隆 吉 雄 功 界 郎 昭 太郎 大 三 隆 雄 三 幸 江 明 江 典 男 貢 一 晴 寛 一 彦 七 種 造 人 信 広 保 澄 昇 也 幸 和 郎

新春座談会

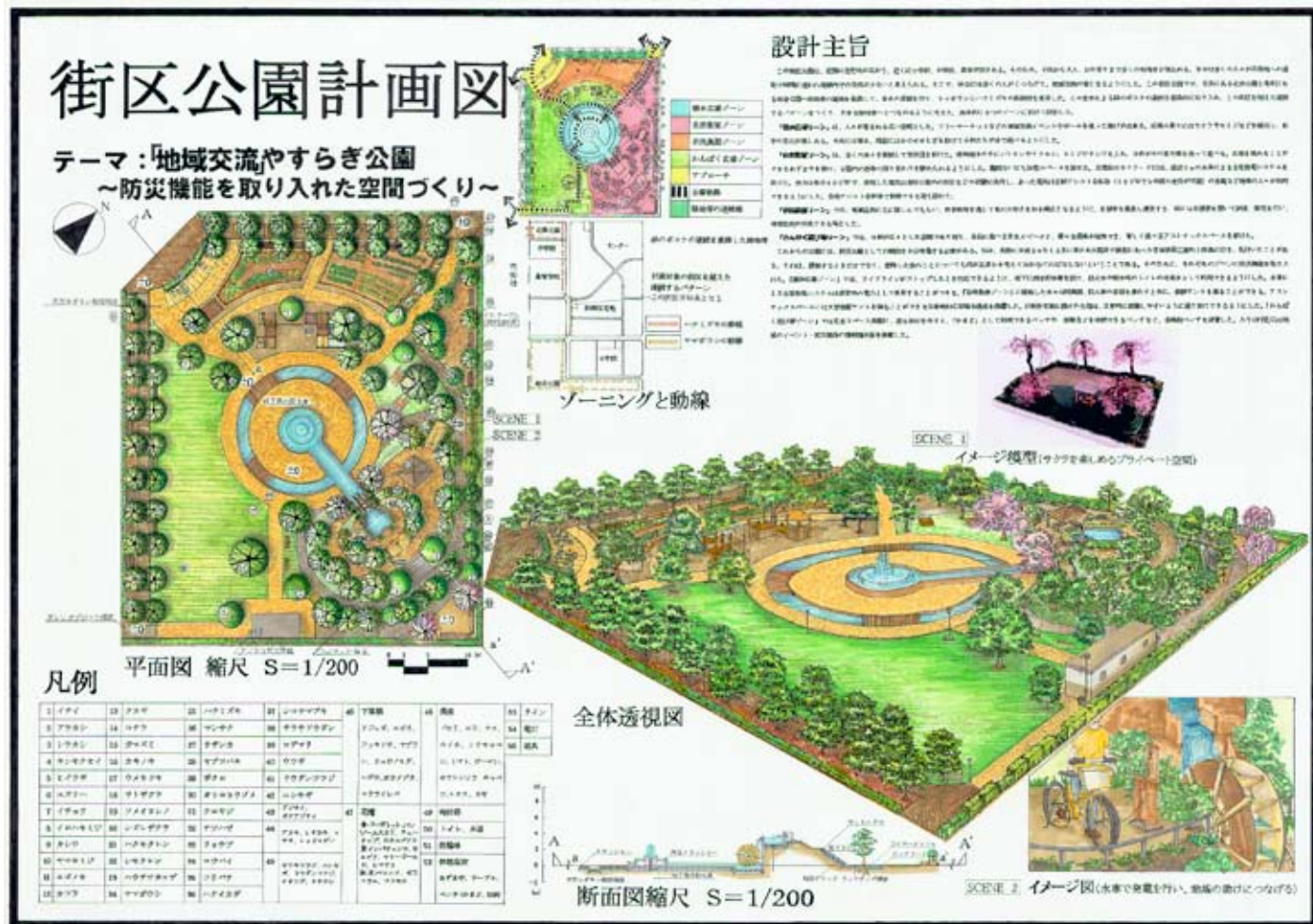
『造園の夢を描く』

全国造園デザインコンクール
40 回記念 近年の入賞者が語る

仲間とともに頑張る



平成23年度 第38回 入選 朝日 純代 長野県須坂園芸高等学校（高校生の部・住宅庭園部門）



平成 24 年度 第 39 回 (一社) ランドスケープコンサルタンツ協会会長賞 朝日 純代 長野県須坂園芸高等学校

「コンペってなんでこんなに楽しいんだ!」と、苦しみもありますが、やりがいに魅力を感じていました。朝日さんはどうですか。

朝日 私は、鈴木さんと野口さんの後輩になります。高校では校長室の前に入賞した作品が貼られており、こんな先輩みたいな作品を私もつくりたいと思ってコンクールに参加しました。

実際やってみると、わからないことが多いので、本などを調べては、図面に向

かう繰り返してましたが、それが楽しかった。2年続けてコンクールに参加しましたが、3年生の時は、防災をテーマにしており、本などを調べるだけでなく、東日本大震災の被災地・東北を訪ね、現地に行くことがとても参考になるということを実感しました。

そして、もっと知識を広げたいと、現在、入江先生の研究室で勉強していますが、高校に入学時は、別のコースを選ぼうと思っていました。

私の学年で緑地計画コースを選んだ人は8人でした。私は実際にコンクールに参加し、造園が楽しくて進学しましたが、同級生の中には、まったく別の分野に進んだ人もいます。

一つ上の学年は 10 人は超えていたように思うので、私の代が少なかったのかもしれませんが。

鈴木 私たちの世代は7人でしたよね。
野口 そうでした。コンクールの図面は、
校長室以外の教室にもずら～っと貼られ

自分でするからこそ得られるもの



ていて、参考になりました。

入江 朝日さんは、先日、グループで日本建築学会のコンペに参加し、佳作を受賞しました。制作のようすを見ましたが、ひと休みの時に、朝日さんは気晴らしになると言って絵を描いていました。それだけ好きなものに出会えるのは素敵なことです。そのきっかけが、先輩の作品で、その先輩にあたる野口さんはどうでしたか。

野口 鈴木さんが私の誘いでと話しましたが、別の友達ももう一人いて、その友達が私たちを誘ったのがきっかけです。私は漠然とですが、高校に入学した時は、環境工学に興味がありました。

コンクールに参加する以前も、お庭を見たりするのは好きでした。コンクールに参加して一番良かったのは、一緒に頑張る仲間がいたことです。また、作品が出来上がり、皆でお菓子を持ち寄り、集まって話をしたことを思い出します。とっても楽しかった。

先ほど、コンクールに参加する前と後で景色が違って見えるというお話がありましたが、私も同じで、今まで何となくいいなと思っていたお宅の庭を見ても、この庭のここがいいんだとか、この公園のここがいいとか、漠然としたものではなく、具体的に思うようになりました。

いま大学では、設計からさらに踏み込んだプレゼン、相手に伝えるスキルを学んでいます。ゲストを迎えての公表会では、ゲストの方からいろいろ厳しい質問をいただいて、人に伝えることの難しさを感じ、どうしたらもっと理解してもらえるかを考えているところです。

入江 実社会に出ると人に伝えなくてはならないことが多いので、いま取り組んでいることが、とても役立つと思います。

また、「仲間がいた」との話がありました。これはとても大事なことで、仲間であるとともにライバルでもあったんじゃないかと思います。そういう切磋琢磨が作品の向上、自分たちの力になってくるのではないのでしょうか。

野口 デザインコンクールは、個人の作品ですが、同じ教室で一緒にやっているという仲間意識があり、一方で、心の中では「負けないぞ」って思ったりします。鈴木さんは絵がとても上手で、絵では負けてしまうから、「アイデアで勝負しないと」と思ったりしました。

鈴木 私からすると、野口さんはいつも

いつもの景色が違って見える



「こうしたい」という想いを大事に 野口さん

とんでもないアイデアを持ってきます。いったいどんなところで考えてるんだろうと不思議に思いますが、図書館に籠って、いろいろと調べてきていました。

仲間がライバルという入江先生のお話は、私が技能五輪に参加し、2人1組のペアだったこともあって実感しています。私だったらこうするとか、そういう風にすればいいのかとか、相手がいるから気づくことが多くあります。

私達のペアは、ピリピリした緊張感はなかったと思いますが、競技参加者の中には、そういう緊張感がこちらにも伝わってくるペアもあり、もちろん仲が悪いというのではないので、そういう緊張感、ライバル意識が作品を高めることになることも感じました。

入江 鈴村さんと雁瀬さんは同級生ですが、仲間とかライバルといった点で、どうですか。

雁瀬 大学時代の話ですが、いろいろなグループで取り組む機会があり、自分のグループや他のグループをみると、仲良くなるグループと仲が悪くなるグループがありました。

私自身は、グループの作業で、自分の力量を試す機会になったり、模型の作り方や色の塗り方ひとつとっても自分とは違うので、自分だけでは考え付かないことを学んだりしました。

また、仲間がいることで、一人ではとてもできないボリュームの制作が出来たりします。

コンペなどで、いろいろな意見を交わし、特に卒業制作では、作品づくりに場所と時間が必要なので、普段のアパートと別に一軒家を二カ月借りて、そこを制作拠点としました。大変でしたが、思い出に残る体験ができました。

入江 仲間の存在は大きいと思います。日造協のデザインコンクールでは、個人作品だけでなく、学校の指導力に対する文部科学大臣賞がありますが、近年は須坂園芸高校と八日市南高校の2校が取り合う状況ですが、個人の力や先生の指導



平成 21 年度 第 36 回 入選 野口恵理 長野県須坂園芸高等学校 (高校生の部・住宅庭園部門)



平成 22 年度 第 37 回 国土交通大臣賞 野口恵理 長野県須坂園芸高等学校 (高校生の部・公共的空間部門)

力に加え、仲間の力、集団の力が反映されているのではないかと思います。

うなっているかが気になり、造園教育がどう変わってきたかを調べています。

というのは、私は高校生の時、技術職員として造園を教えてくれた先生に憧れ、私も教員になって、次の世代に伝えていく仕事をしたいと思っていました。入江 教員をやっている方もいますが、鈴村さんどうですか。

鈴村 私は現在、講師として、造園を教える立場になっていますが、正直、教員というより、野球の指導者になりたくて、教員を志望しました。

こうした中で、造園を選んだのは、実習の際に、地域の方々と生徒が交流しながら行う授業があり、「造園っていいな」と思いました。この時にやっていたのは、竹の伐採で、高校生が地域の方々に造園の技術を教えるというものでした。科目はいろいろ選ぶことができたのですが、「造園」を選びました。

朝日 いま大学1年で、東京に出てきたことでいろいろ考えることもありました。

私の育ったところは、いわゆる観光地

“現在” から “未来” へ 将来に向けての取り組み

入江 きっかけはコンクールとお聞きしましたが、現在、そして将来に向けて、どんなことに取り組んでいますか。野口

さんから順にいかがですか。野口 教員免許の取得に取り組んでいますが、自分が教員になった時、造園がど

造園っていいな もっと緑が好きに



建築学会のコンペに向けた朝日さんの取り組みのひとコマ

でした。しかし、地元で場所と場所のつながりが薄いと感じていました。

そして、東京に出てきてから個々の緑地や緑化は充実していますが、それらは点と点があるだけでつながっていないのだと感じました。

そんな中で、大学の講義でパークシステムを知り、とても興味を持っています。

まだまだ勉強中で、これからどうしたいとはっきり言えるものはありませんが、設計も施工も楽しいと感じています。

故郷は山で囲まれているためなのか、人々の中で「造園」というものの価値は低いように感じていました。

でも、東京に来て人々の「造園」という分野への価値観の違いに気が付きました。

雁瀬 現場監督になって1カ月、今までは会社の仕組みなどを学び、実業の場にやっと出たばかり。土地勘のないところ

で、右も左も分かりませんが、目の前のことを精一杯やっています。

手を動かすのは職人さんで、私は監督として指示を出さなければなりません。しかし、知識も経験も職人さんの方が当然上ですので、いろいろ戸惑いはありますが、一生懸命やっています。

現場に出て、変わったことという、それまでとは違って、いろいろな作品や現場を見る際に、設計者が誰なのかというより、施工者がどこなのかをみるようになりました。

また、見えないところが気になるようにもなりました。例えば、基礎のつくり方などもそうですが、ものづくりの見方が大分変わったような気がします。

それと、大学で設計を学ぶ際に、高校の時のカリキュラムの意図がやっとわかったり、大学の時のコンクリートの授業などをもっとやっておけばよかったと

思いました。とにかく今は一人前に早くなりたいたいと思っており、造園施工管理技士などの資格にもチャレンジしたいと思っています。

入江 仕事上、課題に直面した時に、あの時、もっと勉強していればよかったというのは、皆思うことだと思います。ただ、ここにいる皆さんは、課題を解決する“学び方”をすでに知っていると思います。それは、コンクールの作品づくりそのものが学びの場で、知識や経験を活かし、アイデアを形にし、表現する、伝えるという行為が課題解決の“学び方”と思うからです。

ですから、私はコンクールやコンペを学びの格好の機会としても推奨しています。続いて、鈴木さんどうですか。

鈴木 私は施工を中心に3年やってきて、庭づくりの練習が多かったこともあり、施工者としてやりやすい図面、やりにくい図面があることを知り、職人さんがやりやすい図面というものがどうしたものなのかが少し分かってきました。

もし、今後、設計の方をやることになったとしても、こうした施工者のやりやすさを配慮した図面づくりに活かせたいと思っています。

施工する側として、特に今までの経験から気になっていることは、例えば、エアコンの室外機の前に植栽する図面があった場合に、設計者や施主さんにもう少し、見直しを強く推奨してもいいと思っています。実際、私から上司…設計者、施主さんと意見が伝わっても、結局変わらなかったりします。私の先輩方も同じ経験をし、施主さんの意向を重視するといったことは仕方のないことかもしれませんが、生きものをそこに植えている私達からすると、とても切ない気持ちになります。

まだまだ、駆け出しの人間ですが、ものをいうことができない植物の立場から、簡単に何でも植えればいい訳ではないなど、誰に対してもものを言えるところまでいけたらいいなと思っています。

また、私が卒業後、設計ではなく、施工を選んだのは、高校時代に西武ドームで行われる「バラとガーデニングショ

ウ」で、フロントガーデンづくりをやらせていただき、そこでものづくりの楽しさを知ったからです。

野口さんと私を含め女の子7人で設計から施工までやりました。造園は力仕事の部分もありますが、女の子だけでも作ることができるものもあります。そうした体験が自分の中にあり、現在のモチベーションになっていると思います。

入江 難しい図面を職長である親方さんが読み解いて施工する場面を目にされているお話があり、そうした設計図通りに施工をするスタイルが多いとは思いますが、デザインがエンジニアリング、技術の開発を促していくことも多々あります。現在の仕事の流れはなかなか変えられないこともあると思いますが、コンクールやコンペがいいところは、これまでの仕事の流れや仕組みでは出来ないようなアイデアを提案して、実行に生かされる可能性もあります。

参加する側から、指導する立場になった鈴木さんはいかがですか。

鈴木 現在、授業では測量とデザインを教えています。しかし、デザインを教えると言っても、40人いれば40人が違うことを考えるのがデザインで、40人それぞれの個性、いいところをどうやって伸ばしたらいいか、悩んでいます。

生徒が私に相談したり、私が指導を行うと、デザインについては、何が正解というものではなく、私好みになってしまうからです。今、恩師の授業などをみさせていただき、改めて勉強しています。

また、評価や締切があり、締切から妥協をしたり、断念してしまう生徒もおり、それをどうしたら、いい方向に持っていけるかを考えています。

入江 個性を大事にするということが大分言われてきましたが、私はむやみに個性を重視する必要はなく、逆にこれからの時代は専門家集団としての力が大事になってくると思います。また、鈴木先生のカラーがついてしまっはと懸念されていますが、門下生という意味で私はいいいことだと思っています。実際に農大や千葉大といった学校のカラーもあるでしょうし、造園家にも系統があり、施



初めて雁瀬さんが現場監督を務める「国営明石海峡公園」神戸地区 遊びの森地区整備工事で



第50回技能五輪全国大会で競技中の鈴木さん（手前）とペアを組んだ湯本光さん
鈴木・湯本さんペアは、この後、日本を代表し第42回技能五輪国際大会（ドイツ）に参加

意見を聞こう 現場を見よう

新春座談会

『造園の夢を描く』

全国造園デザインコンクール

40回記念 近年の入賞者が語る

工会社だって、その会社なりのやり方があったりします。ですから、あまり心配することはないのではないのでしょうか。

今後にもいろいろな課題が出てくると思いますが、目指すところはどこですか。

鈴木 私も恩師に憧れて現在の仕事を選んだ部分があります。学外からのいろいろな相談も来ており、それに対応する姿も素晴らしいと思っています。

私も、1つ2つの依頼に対応していますが、そういう地域に根差した高校、地域になくてはならない学校にしていけたらと思っています。

大学の実習で作品発表を行う野口さん



こうすると、楽しく、役に立つ コンクール応募者へのアドバイス

入江 現在、ちょうどコンクールに取り組んでいる学生の方々がいると思います。これからコンクールに取り組む人たちへのアドバイスやヒントを、鈴木さんから順にいただけたらと思います。

鈴木 私はコンクールの作品を仕上げるに当たって、いろいろな本を読んだり、町を歩きながら見て回ったことを参考にしたので、普段何気なく歩いているところでも、見方によって変わってくるので、そうしたことに注意してみると面白いことがあるのではないかと思います。

鈴木 後輩へのアドバイスというよりは、過去の自分に何が言えるかなと考えてみると、いろいろな人との交流というか、コミュニケーションを大事にしたいと思います。何の花を植えようかと思った時に、いろいろ聞いてみて、言葉を交わすと、そこから得られるものがたくさんあると思います。

友達でも親でも先生でも、とにかく話してみ、表に出してみ、気が付くことがあります。実際に施主さんのある庭づくりで話を聞くのは当然ですし、自分の意見も大事ですが、他の人の意見を聞くとヒントが得られると思います。

雁瀬 設計するときには、いろいろな引き出しがあった方がいいので、いろいろなものを見に行ったり、本を読んだりしておく、自分の図面にどう取り入れようかなど、アイデアのもとになります。

また、コンクールの設定に、住宅に住んでいる人の家族構成や公園の立地などの詳細な条件はなかったかと思いますが、実際にそういったことを想定して、どう利用されるかといったことや、参考になりそうなところに行き、朝、昼、夕方での利用のされ方、周辺の交通量、通行者、風の流れなどを観察すると参考になると思います。

その地域の歴史性、気候条件なども実際の設計では、大きな要素になると思うので、そういった見えない部分まで考えて、課題に取り組むと面白くなるのではないかと思います。

いま、現場にいるから余計にそう思いいますが、設計段階ではわからないことが、施工現場では様々なトラブルとして出てきたりします。コンクールではそういうことまでは考える必要はないのですが、足を運ばないと見えてこないものがあるというのは知っておいてもらいたいです。

朝日 高校を卒業してまだ1年で、大したことは言えませんが、自分の経験から必要なこともあまり必要でないと思われることも、とにかく自分で調べることが大事だと思います。自分で調べないと何にもなりません。

自分で調べるからこそ面白いものに出会ったりするので、そういう興味を持てるものに会って欲しいと思います。

また、先生がこうした方がいいと言ったから、そうするのではなく、自分の考えはきちんと持って一つの意見としていろいろな人の意見を聞くということが大事だと思います。自分の我を通すという言い方が良くないかもしれませんが、「自分はこうしたいと思っているんですが、何かいい方法はありませんか」など、自分の考えを通す工夫も必要だと思いますし、そうすることでその点について、より深く考えることができます。

入江 高校生の時、コンクールに応募した際はどんなところを調べたんですか。

朝日 2年生の時に鳥が好む樹木を取り上げましたが、鳥に関する知識をひたすら調べました。3年生の時は、防災をテーマにしましたが、電力のことなどまったく分からず、分からないと設計できないので、防災について一から調べました。分からないからやらないではなく、分からないなら勉強するという風にとすると、自分のためになると思います。

入江 防災公園については、東北の被災地で、実際の話聞き、現地を見ることが、現場に即したアイデアが出てきたのではないかと思います。野口さんいかがですか。

野口 話そうと思ったことが、大分出ましたが、先生の意見を受け自分の考えを変えてしまう人は多いと思います。大学の実習でもそう感じる場合があります。

しかし、そうやって自分の考えをすぐに変えてしまうと、当初のテーマからどんどん離れていってしまいますし、自分の「こうしたい」という想いを大事にして、先生の話も一つの意見として参考にしながら、どうしたら自分が想い描くものにもに近づけるのかをきちんと考えて取り組むことが大事だと思います。

ただ、時間制限もあり、すべて自分が納得するようにはならないこともあると思うので、そういう時は、自分の譲れない部分を明確にして、それ以外で妥協する

ることがあっても、大事な部分はいろいろと解決策を模索して実現させていって欲しいと思います。

また、いろいろな意見を聞くという話がありましたが、一緒にコンクールに取り組んでいる人たちと作品について、質問し合うと参考になると思います。皆、価値観が異なるので、ここは変だと思ふとか、こんな風に感じるという意見をもらおうと、こんな風にみえるんだとか参考になります。そういういろいろな意見を柔軟に聞くことも大事だと思います。

これは造園に限ったことではありませんが、普段から自分の考えや言いたいことを表現する習慣をつけておくことは、社会に出てからも役立つと思っています。ですから、コンクールの作品づくりを機に、自分の言いたいことを相手に伝える技術というか、意見を聞くことと合わせて、コミュニケーション能力を高めるといいと思っています。

入江 自分の考えをきちんと持って、他の意見も聞く力や自らの提案をプレゼンテーションする能力は、近年、造園に限らず当たり前のよう求められるので、いろいろな場面で役立つと思います。

これから高校生がコンクールに取り組む場合、いま先輩たちがいったことに注意して取り組むと、これからの自分にとって、プラスになることばかりだと思います。



前回の第39回全国造園デザインコンクール表彰式で入賞作品を説明する朝日さん④
表彰式会場には、入選・入選、佳作全作品を展示。いずれも労作で見たえも十分⑦



新春座談会 『造園の夢を描く』 日造協主催「全国造園デザインコンクール」40回記念

造園界への期待と展望

入江 最後に造園界がこうあって欲しいという期待と皆さんの夢をお聞きしたいと思います。東京オリンピック、震災の復興、世界遺産など、造園に関わる場面はこれまで以上に広がってきていますが、雁瀬さんどうですか。

雁瀬 もっと「みどりの街」を増やしたいです。世界から日本の「みどり」を観光に来るような、そんな日本の顔になるような緑地空間をつくりたいです。

日本庭園は、すでに観光地になっていますが、都市ランドスケープといったような緑地についても、世界の人が憧れるような空間がつくれると思っています。造園がそういうものをどんどん提案していけたらいいと思っています。

鈴木 多くの親方と技能五輪のお蔭で直接お話しすることができ、いろいろな方がいることを知りましたが、私は変わって欲しくないと思います。いろいろな親方がいていいと思いますし、日本の庭を守っていききたいと思います。

和洋折衷とか、イングリッシュガーデンとか、いろいろな流行などもあると思いますが、日本の美を忘れて欲しくないという思いがあります。そういうものに寄り添っていききたいと思います。

鈴木 学校で先生が教えられることは限られており、現業で活躍されている方々を迎えての授業をもっと増やしていくことができればと思います。

何がきっかけで興味を持ってもらえるかわかりませんが、実際に取り組まれている方々の話は魅力的です。現在、年に1回しかなく、そうした授業は生徒の食いつきが違うので、自身の努力も踏まえ、生徒の身に付く取り組みを少しでも多くできたらと思います。

コンクールもそうですが、普段と違った取り組みをすると、思いもよらない能力を生徒が発揮したり、それがきっかけで日常生活まで変わる生徒もいます。そういう機会を大事にしたいと思います。

また、造園教育については、造園の多様化も含め、教員が現実に即した授業を行うのは難しくなってきたという部分もあります。そういう点からも、実務者の協力を期待したいと思います。

朝日 経済中心の社会から環境中心の社会になったと、大学の講義の中でも聞く機会が多くありますが、その環境の中心になるのが造園だと思います。もっともっと造園が社会に出ていって欲しいと思っています。

野口 造園技術と一口にいても、技術

者の方がそれぞれの技術を持っており、一つの技術についてもいろいろなやり方があるなど、まとまった技術になっていない部分もあると思います。

私は、「街路樹剪定士」という資格で、それに関わる人が受検しているのに何で合格率が4割程度なのかと疑問に思いますが、技術が体系化されていないこともあるのかなと感じています。

そうしたことも関係して、私が教員になる時代の造園にどんな課題があるのかを知るには、母校の造園教育を振り返って研究することで、未来につながる課題も見えてくるのでは？という先生の助言で、研究に取り組んでいるところです。

造園技術を先生が伝えにくいのは、技術が明確になっていないことも一つの原因だと思います。正解に近い技術というものがあれば、もっと教えやすく、造園を学ぶ意義が明確になれば、それを学びたいと思う人も増えるし、世の中が評価する機会も増えると思います。

入江 造園技術がオーソライズされていない部分があるといった、造園の良さでもあり悪さでもある指摘もありましたが、オブザーバーの方々に一言伺いたいと思います。

大室 将来、教職を目指す方もいるとのことで、その面についてもお話しします。造園は自然素材を扱うことから、同じものが二つと無いため、人に教える難しさがあります。剪定作業一つとっても同じ形の枝が無いため、理解に時間のかかる生徒もいます。本物を見せながら現場での指導が大切だと思います。棒などで枝を指差しながらの指導などの工夫が必要となります。しかし、高校生にとって、限られた時間と環境の中で、それらが身に付くまでは難しいのが現状です。我々教員も日々努力し、研鑽を積んでいかなければならないと思います。教職の道を目指している人は特にですが、造園分野に特化せず、「栽培」分野などにも理解を深めて、造園を目指す人材を一人でも多く育てて頂ければと思います。

藤巻 コンクールの表彰式では受賞者の方々から作品の説明がありますが、朝日さんが受賞された時のことは鮮明に覚えています。あの時は、声もまだ小さかったように思いますが、随分と成長され、自分の考えをはっきりお話しされる姿を頼もしく思っており、ここに参加された方々をはじめ、皆さんの成長やこれから造園を学ばれる人たちに大いに期待したいところです。

しかし、お金を払って学ぶ学生時代とお金をもらって働く実社会とのギャップも出てくると思います。試験の話もありましたが、特に公共事業などでは、設計図面が重視されますし、技術以前にさまざまな法規を遵守することが求められます。こうしたことから、思い通りにならない場面も多々あります。私達も変えなければならないことは変えていく努力をしておりますが、なかなか思うようにはならないこともあります。しかしながら、私は近年の指定管理者といった業務も含め、造園はお庭番であり、これからもなくなることはない大切な仕事だと思っています。若い方々が活躍し、さらに若い方々が造園の世界に入って来ることを楽しみにしています。

高梨 まず、最初に野口さんの疑問ですが、受験者の方々がすべて街路樹剪定士として要求される能力を身に付けている訳ではないからです。剪定作業に関わっていても、実際に樹上での作業経験が浅い方もいれば、作業経験は豊富でも安全管理などをはじめとする法規をきちんと理解されていない方もいらっしゃると思います。街路樹剪定士制度は、街路樹に関する知識や街路樹を剪定する卓越した能力が求められる資格ですので、合格率が低くなっているといえると思います。

コンクールについては、一つ一つの作品を見る中で、先生方がどれだけ苦労をされ、携わってこられたかを感じていましたが、改めて生みの喜びより苦しみといった大変な思いをされてコンクールに取り組まれていることを聞き、コンクールへの思いを深めることができました。

座談会を終えて

座談会では、都市ランドスケープをもっとというお話や伝統的な技術を守りたいというお話があり、その両方が大切であり、日造協では屋上緑化や壁面緑化など、そうした多様な緑化、「みどり」に関するものはすべて造園に関連する分野として、積極的に取り組んでいます。

そして、もう一つのストック活用の時代に求められているのが、指定管理者制度に関わる取り組みです。すると、これまでの造園に加え、サービス産業のようなことも技術の範疇になり、さらに幅が広がることとなりますが、そういう多様さも造園の良さとして認識してもらい、こうした技術の体系化も合わせて行っていくことの必要性を感じています。

また、座談会では教育の中に現業の話をとの意見もあり、インターンシップを始め、そういう取り組みをもっとしていきたいと思っていますし、環境中心でその中心は造園がという思いは私達も同じなの

最近、時代の流れでCADによる作品もあり、その評価については別に論じる必要があると思いますが、今日のお話でコンクールがそれに参加される方々のいろいろなきっかけに繋がっていることを伺い、大変嬉しく思いました。

また、コンクールに参加される方々は、「見る、聞く、読む」といった非常に基本的なことや探究心を養っているのではないかと思いました。造園は非常に幅が広いので、一つの図面をつくる際には、あれもこれも調べなければならないということになりますが、こうした経験は造園に限らず、社会に出てからも役立つことだと思います。

さらに、皆さんがどのような夢を持たれているのか、造園界にどのような期待を抱いているのかもお聞きすることができ、私にとってもいい勉強をする機会になりました。有難うございました。

入江 最後に大先輩方から感想などをいただきましたが、今日は大変貴重なお話をお聞きすることができました。

何度か申し上げておりますが、コンクールは、多様な学びの機会となりますし、特に、このコンクールは40回という長い歴史と実績を有し、高校生をはじめとする若い学生たちにとって造園教育のファーストステージにはなくてはならないものになっています。

最後に、「全国造園デザインコンクール」を主催する日本造園建設業協会におかれましては、これからも末永くコンクールを続けていっていただくことを切にお願いし、本日の座談会を終わらせていただきます。有難うございました。

で、さらに頑張っていきたいと思っています。

コンクールについて寝ないで作図の話もありましたが、実社会でもコンペの締め切りが迫ると、似たような状況になり、改善も必要ですが、それが貴重な経験の場になっている部分もあります。

我を張るということも出ていましたが、発注者などに対して、自分の意見、造園の道筋を通すことも当然大事なことで、説明責任を果たすことが当然の責務にもなっていますが、現場では、他の工種と一緒にすることも多く、そうした際に、きちんと主張できないと、工程や作業に影響が出てしまいます。

若い人はコミュニケーション能力に欠けると一般に言われたりしますが、座談会に参加された皆さんは、コンクールで多くのスキルを身に付けられたように感じました。こうした若い方々を育てていくことも私たちの使命と改めて認識しました。 広報活動部会長 鈴木誠司